

豊かな心を持ち、自ら学ぶことができる生徒の育成 —基礎的・基本的な内容を確実に習得できる教科指導を目指して—

1 「基本的な考え方」

生徒の「確かな学力」を「単に知識や技能だけでなく、学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などを含んだ幅広い資質や能力で構成される」ととらえたとき、学校教育では、まず全教科の授業でその育成に取り組むことが大切になってくる。なぜならば、生徒が抱えている課題は、1つの教科の基礎的・基本的な事項をもって解決できるものとは限らず、様々な教科の内容が関連し合っていることが考えられるからである。

ところで、このような「確かな学力」を育成するための土台となるものが、学校においては学級集団である。好ましい雰囲気や学級集団が育成されると、教科等の授業がよりよいものとなり、確かな学力が育成されていく。そのため、本研究では「学級経営」にも焦点をあて、特別活動（特に学級活動）を中心に研究を深め、確かな学力の育成のための学校生活の基盤を作っていく。

また、本校生徒の生活基盤は、言うまでもな

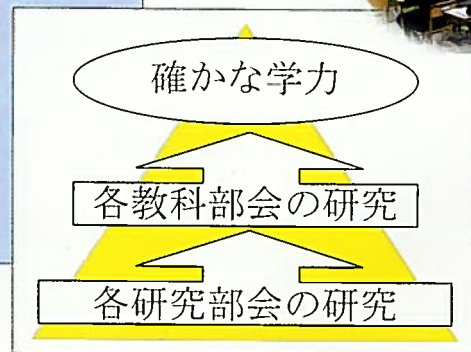
く家庭生活である。そのために、「確かな学力」の育成は、家庭での生徒の生活を無視しては不可能である。本研究を進めるために、学校教育だけの取り組みでは必ずしも十分でないことに留意し、「家庭や地域の協力」を得ながら「確かな学力」の育成を進めていく。幸いにも、本校では生徒は伝統的な祭りへの参加などがあり、地域の中での生活もみられる。このようなことを活用しながら、生徒の家庭生活がよりよいものになるように、研究を進めていく。

2 「研究組織の考え方」

中学校では、ともすると学年部会における取り組みが研究の中心となる傾向が見られる。これには、学年毎の生徒の違いによった指導ができるなどの利点もある。しかし、そのために研究が学校全体で深めにくい、ということが考えられる。

そこで、第1学年・第2学年・第3学年の各学年部会を横断的に、教科指導・学級経営・家庭学習の各研究部会を縦断的に組織した。このようにして、研究部会と学年部会が有機的に結合し「確かな学力」を支えていく基礎となる能力を学校全体で育成しながら、確かな学力の育成の研究に取り組んでいる。

また、各教科の研究を進めるにあたっては、教科部会での研究を中心として進める。各研究部会での基礎となる取り組みを基にして、各教科の授業などを通して、生徒に「確かな学力」の育成を図り、定着を図っていく。



(1) 「教科指導研究部会」の取り組み

部会テーマ 「生徒が互いに、高め合い・深め合う授業づくり」

本研究部会では、主に授業を通して「確かな学力」を生徒につけていくことを考えている。授業は、教科の内容を学習する場であるが、それが教師からの一方的な教え込みのものでは、生徒に本当の確かな学力がつくとは言えない。また、生徒たちだけでそのような内容を学習していくことは、大変難しいことである。本研究では、授業で生徒間はもちろんだが、「教師と生徒」の間でも考えを互いに共有し、高め合い・深め合うことを通して、確かな学力の育成を図ろうと考え、授業を中心として研究に取り組んだ。数学の授業の取り組みは、次のようになっている。

<数学科の授業の取り組み>

本校における少人数指導は、学級集団の教育力を最大限に活用しながら、少人数指導のよさを生かしていこうとしている。そのため、主に新しい学習内容（認知的側面を育成する場面）ではT T指導を行い、定着や発展の場面（技能的側面を育成する場面）では、生徒の自己評価を基にしてコース分けを行い、少人数指導を行っている。このような学習形態の工夫によって、生徒一人ひとりへの細やかな対応が可能になり、生徒の理解も深まった。

しかし、このようなT T指導や少人数指導には、確かに生徒たちにきめ細やかな指導を可能にした反面、きめ細やかすぎて、生徒を受動的にしてしまう危険性がある。

授業は、教師と生徒が主体的に構成していくもので、教師だけがどれだけ丁寧に指導しても、それだけで成立するものではない。授業の中で、

生徒同士が互いに影響し、高め合うことが、確かな学力の育成につながると考える。ただし、ここで注意したいことは、生徒同士だけの活動で授業がなされればよいということでない。生徒同士の活動だけでなく、生徒と教師の間でも、互いに高め合い、深め合うことが大切であると考える。

授業では、このような今までの取り組みを反省しながら生かしつつ、それに加えて、互いに高め合い・深め合う授業を構成する。そのために、新しい学習内容においては、一斉授業を行う。その中で、生徒同士の意見の交流や高め合いに配慮した展開をしていく。

また、本時の定着の場面では、生徒の自己評価によるコース分けをし、コース別指導を

行う。コース別指導で習熟の遅れている生徒には、少人数の一斉指導を行い、定着をめざす。ここでは、生徒同士の交流だけでなく、スモールステップを心がけた指導を行い、生徒の理解が少しでも深まるように配慮する。

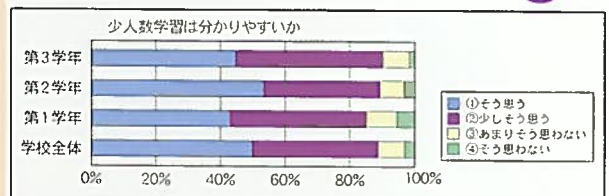
また、習熟の進んでいる生徒は、2～3人の小グループで定着学習に取り組ませたい。少人数の学習によって、生徒間の意見の交流を頻繁にさせ、「互いに高め合い・深め合う学習」になるように留意したい。ここでの教師は、小グループに他の小グループの意見を紹介するなど、小グループ間の交流を補助するようにしていきたい。また、小グループで出された意見を、授業の最後には学級全体で紹介するなどして、小グループの活動をその中だけで終わらせることがないように心がけた授業を行っている。



(2) 「成果と課題」

少人数習熟度別指導について、生徒へのアンケートをした結果は、次のようになっている。この結果をみると、本校の少人数学習は、生徒の支持をおおむね得ていると考えられる。また、少人数学習により教科が好きになった生徒も多い。しかし、授業において「高め合い・深め合う」授業ができているかという点、十分ではないと考えられる。今後は、テーマに迫れる授業ができるように、今まで行ってきた、

①指導計画の工夫 ②指導方法の工夫 ③評価方法の工夫④家庭学習の工夫など研究を更に深めていきたい。





課題を見つけ、自力解決し、練り上げることで、
 お互いのよさを自ら求め、高め合う子の育成

思考の過程を大切にする授業へ

問題を解かせればよい、答えさえ出せばよいという教師の姿勢が、子どもたちを「答えさえ出せばよい」という結果主義（見える学力）にしてしまいます。

結果主義に陥ると、結果だけで人を判断するようになることにもなり、そこには人と人の心の交流は生まれません。だから、「思考の過程を大切にしていける授業への転換が必要である」と考えています。

思考の過程を大切にする（過程主義）授業をすると、見える学力だけではなく、見えにくい学力（思考力・判断力・創造力）や、洞察力・人の心を察する心までも育てることができると考えています。

そして、共同体（学び合い・愛・ラヴ）へ

過程を大切にする授業をしていくと、子どもたちはお互いに理解し合おうとし、響き合い、心の交流をするようになります。

教師は子どもたちの思考過程から学び、心の交流を支えていきます。すると、教師と子どもの関係は、教える・教えられる関係から、ともに学び合う関係へと変化していきます。この状態を、私たちは共同体（学びラヴ）とよんでいます。

この学びラヴを目指して、私たちは、授業改善を行っています。



研究内容

①授業構造の確立

算数の授業を、次の学習過程で構成しています。

- ・課題把握
- ・自力解決
- ・練り上げ
- ・評価問題
- ・ふりかえり



②授業実践

普段の授業を一番大切にしています。教師同士が普段から授業を見合い、よりよい授業を目指しています。他県からも遙々参観に来られることも多いので、子どもたちも教師も、目標を持って取り組んでいます。

③授業分析

校内授業研究会では、児童の学ぶ姿をとらえるために、参観者は児童の行動や発言を詳細に記録します。

この記録を集計し、分析することで、授業の質をできるだけ客観的にとらえ、その後の授業に活かしています。

④ノート分析

自力解決・ふりかえりのノートを分類することで、児童の実態を捉え、よりよい自力解決・ふりかえり・自主学習への支援を探っています。

研究成果 子どもと教師・お互い成長

授業の様子から

1年担任…1年生なりに、自分たちで課題について考えを深め合い、学び合うことの楽しさを共有できるようになってきました。一人ひとりのいいところがお互いに見えてきています。より高いレベルを目標に、子どもたちと算数を楽しんでいきたいです。

教師の成長から

6年担任…「みんなで授業を創り上げる」ことへの意識改革に一苦勞してきましたが、少しずつ変化が出てきました。また、扱う問題の工夫、つまずいたときに思考の助けとなる教具の準備で、子どもたちの能動的な活動を引き出すことができることを学びました。

2年担任…自分自身の「課題把握」のとらえ方が変わりました。その結果「課題」こそが授業の一切の鍵を握るものなんだということを感じています。一昨年は、「課題と問題はちがう」ということ、昨年は「課題が一時間を貫くものである」ということ、今年は「子どもたちとともに課題を作りあげられれば、授業が子どもたちのものになる」ということを学びました。自分の教材観や児童観などのすべてが課題の一文に集約されると今強く感じています。



確かな学力を育てる授業の創造 算数科における「数学的な考え方」の育成を主眼において

「学び合い」をめざして

本郷小学校では研究指定1年目の今年度、児童相互の「学び合い」を大切にし、算数授業の工夫・改善を行うことによって「数学的な考え方」の育成を図り、児童に「確かな学力」をつけるべく実践を進めてきました。

始まったばかりの研究ですが、一端を紹介させていただきます。

TT指導の工夫

TT指導のメリットは、つまずきのポイントでもある“課題把握”を、児童一人ひとりの実態に合わせてきめ細かく支援し、一人でも多くの児童を「学び合い」のステージにのせられることではないかと考えました。そこで、下の図のようなTT指導の基本パターンを作り、効果的なTT指導について検討してきました。

特に、今年度は「課題把握」の段階においてつまずいている児童を教室の後方に集め、T2によるミニ授業の形で課題把握のための支援を行ってきました。その結果、一人の教師による一斉授業のときには時間内にねらいに達することができなかった児童も、“自力解決”の段階、あるいは“発表・学び合い”の段階へと進めるようになってきました。(児童の意識調査の結果は下のグラフを参照してください)

ホワイトボードの活用

本校には、手ごろなサイズ(A3判程度)のホワイトボードが児童数分あります。今年度は研究授業の場合はもちろん、ふだんの授業でもこのホワイトボードが大活躍でした。書き直しが容易なので個人思考のツールになり得るといって、個人思考の足跡をそのまま黒板に貼り付けて発表に移れるということなどが人気の理由です。

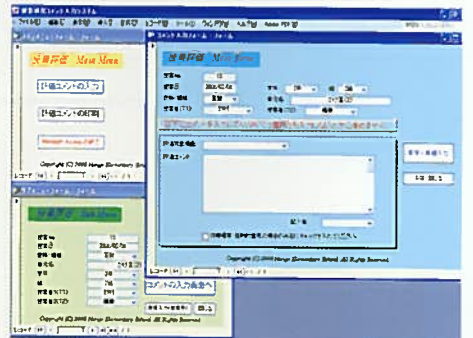
このホワイトボードの利用をきっかけに、発表や「学び合い」を意識し、筋道を立てて考えたり、自分の考えを分かりやすく表現しようとしたりする児童が増えてきました。今後も、利用の仕方によっては、ホワイトボードが本校が目指すところの「数学的な考え方」の育成に役立つのではないかと考えています。



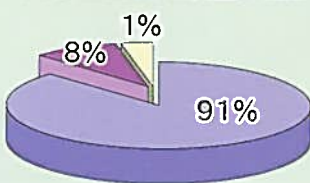
事後研究会の充実

児童の学び合いと同様に(それ以上に)、教師間の「学び合い」も大切です。しかし、時間的な制約もあり、授業後の事後研究会では、参加者全員の意見を引き出し、いろいろな角度から授業について議論しあうということは大変難しいことです。せっかく良い意見を持っていても言わずじまい・言えずじまいになってしまうことが多々あるのではないのでしょうか。

そこで本校では、すべての教師のすべての意見が授業者に届くよう、データベースソフトを利用し、授業のコメント入力システムを作りました。その結果、事後研究会では話題を絞って議論することが可能になりました。



TT授業に対する児童の意識

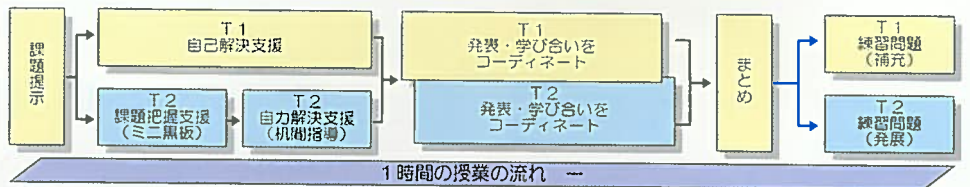


■ 肯定的 ■ どちらでもない ■ 否定的

2005年12月調査 3年生以上152人対象

今年から取り入れたTT授業に関しては、9割以上の児童が肯定的にとらえています。その理由としては、「先生が二人いるので、分からないときに聞きやすい」が大半を占めています。

一方で、1割弱の児童が、TT授業に対して「教師一人の授業と大差がない」、あるいは「教師一人の方が分かりやすい」と答えています。現在、その原因の分析を進めているところです。



図：TT指導の基本パターン

これからの研究

今年度、確かな学力を育成すべく、算数科を中心に指導内容や指導方法の工夫・改善に取り組んできました。しかしながら、焦点を絞りきれずに取り組んできたという感否もありません。例えば、「数学的な考え方」のとらえに関しても、今年度は学習指導要領解説編等を参考に「筋道を立てて考える力」と広く考えてきましたが、実際の指導場面では更なる具現化が必要であることが分かりました。

今後は、育てたい児童像をより明確にし、そのためにどんな工夫・改善をすべきかについて考え、児童の成長の跡が確かめられるよ

うな研究にしたいと思っています。

次に、本校では、今年度初めて本格的なTT指導に取り組んできました。その結果、先にも書きましたように「課題把握」の段階における指導の方法について、新たな提案をすることができました。

今後は、本校が大切にしている「学び合い」の場面での有効なTT指導について検討し、9割以上の児童が肯定的にとらえてくれるTT指導の更なる充実を図っていきたいと考えています。